

蜜柑

福井県立藤島高等学校

吉田 遥香

真っ白な一面の雪が、太陽の光を受けてきらきらと輝いている。実家のある今庄の冬の朝は、暖かな日差しが雪景色を包み込む。冬になって、例年のごとく実家に帰ってきていた私は、寒さと眠気とに参ったものだと思つた。その白く染まった視界の中に、鮮やかなオレンジ色がぼーんと飛んだ。

私はその情景を呆然と見つめた。どうやら、まだ幼い従妹が同い年の従弟と喧嘩をしてみましたようで、わあわあと泣く声が聞こえた。従妹が放り投げたらしい蜜柑が、敷き詰められた雪の上にぽつんと取り残されている。

それを見てふと、幼い頃、自分が同じようなことをしたのを思い出した。

あの日も寒さで指がかじかむ頃、私は小学生になったばかりだったと思う。冬の山奥で迎える夜は、刺すような寒さが訪れる。私はその寒さの中、こたつで家族や親戚と食べる蜜柑が好きだった。寒さに耐えて廊下から持ってきた蜜柑は、身にしみるように冷たくて、口に入れるとほんわりと甘さが広がるのだ。

あの頃はまた、曾祖母が生きていた。実家に帰っている間、私は曾祖母に用があると、まず、曾祖母の部屋の障子の前で呼びかける。

「おおきいばあちゃん、はるかだよ」

そう声をかけると返ってくる、「はあい」という、か細くもどこか安心する声。その返事があつたら、「おおきいばあちゃんは起きてるよ。入っておいで」という合図だった。

朝畑へ散歩に出る以外、家内では寝たきりの曾祖母はしかし、私が部屋に入るといつも嬉しそうに笑った。「はあるあちゃん」と、出しづらい声を絞って、名前を呼んでくれるものだった。

「ねえねえ、お蜜柑剥いてあげようか」

私がそう問かけると、曾祖母はうんうんと頷いてくれる。それが嬉しくて、あの時期はほとんど毎晩、静かな曾祖母の部屋にとことこと入って行って、蜜柑の一つを剥いては、はい、と曾祖母に食べさせていた。

けれどその晩は、私が蜜柑を剥こうとすると、お風呂に入りなさいと言われ、私はしぶしぶ蜜柑を手放した。あがつてきたら絶対剥いてあげるからね、と曾祖母に念を押して、私は風呂場へ駆けていった。

ところが、風呂を済ませ戻してみると、障子は固く閉じられ、部屋の明かりも消えていた。焦って何度声をかけても、曾祖母からの返事がない。

「もうおおきいばあちゃんおねんしたよ」

そう言われ、私の中でぷつりと何かがぎれた。やだやだと駄々をこね、大声を出した。それでも夜だから静かにするよう言われ、拗ねた私は、窓を開けて、握りしめていた蜜柑を外へ思い切り投げたのだ。暗闇の中で白く光る雪の中に、蜜柑が鈍く埋もれてしまった。叱る母親の声を聞きながら私はわんわん泣いた。せつかく曾祖母に蜜柑を剥こうと思ったのに。約束したのに。悲しいのか悔しいのか、よくわからないままただ泣き続けた。いくら泣いても、「はあるあちゃん」という曾祖母の声が障子の向こう側から聞こえてこなかったのが、堪らなく寂しかったのかもしれない。

次の日の朝、障子の前で呼びかけると、曾祖母は起きていた。ひよいと入って行って、「あのね、もう、お蜜柑剥いてあげない」

何の前ぶりもなくただそう言って、私は部屋から出た。曾祖母には、どうして私がそんなことを言ったのかわからなかっただろう。あのとときの曾祖母がどんな顔をしていたのかあまりよくは覚えていない。けれど記憶の中の大きな丸い目を思い出すと、胸がきゅっと締め付けられた。

だってその日、朝ゆつくりと畑を巡回し終えて家へ入ってきた曾祖母が、転がっていたのであろうしよぼくれた蜜柑を手をしているのに、私は気づいていた。けれど知らないふりをして、曾祖母に声もかけなかった。

それから数年経って、曾祖母が亡くなって、今日に至るまであの出来事のことを忘れていた。外に出て従妹が投げた蜜柑を拾い上げる。

もっと、曾祖母に優しくすればよかったな。もう少し、私が大人になれたらよかった。蜜柑のほんわりとした甘い香りを嗅いで、ほんのりと苦い思いを描く。冷たい態度をとったことを、私は今更ながらに後悔した。

曾祖母はきつと、蜜柑が食べたいかどうかに関係なく、私の満足する顔が見たくて私が剥いた蜜柑を食べてくれたのだと思う。喜ばせるつもりの方が、自分のために蜜柑を剥き、曾祖母はそれをわかっていた。もちろん喜びもあっただろうが、いつでも頷いてくれる曾祖母の優しさが、私は嬉しかった。ふと、私はあの曾祖母の笑顔一つから、他人への思いやりを学んでいたのだと気づいた。

傍で従妹が、頬を膨らませ、俯いたまま立っていた。そろそろと近づいて、声をかけた。

「ねえ、お蜜柑、剥いてあげようか」

従妹は、仏頂面のままこくと頷いた。

曾祖母が柔らかに笑った気がした。